

## 犯罪被害者支援活動における学生の成長過程に関する研究

加藤 利恵

### 1. はじめに

本報告は、本学の社会福祉学科の2年生から4年生で犯罪被害者支援に関心のある学生と共同で行っている研究、「美作大学犯罪被害者支援研究室」（以下、被害者支援研究室）の2022年度の実績をまとめたものである。

被害者支援研究室は、2016年に創設し、岡山県北部を活動拠点に「犯罪被害者の気持ちを理解し、被害者も加害者も出さないまちづくり」を目指した活動をしている。その内容は、学内で勉強会を開いたり、市街地や大学構内でパンフレットを配布したり、パネル展示やフォーラムの開催等である（新谷 2019、2020、2021、新谷・加藤 2023）。

被害者支援研究室の活動は、自主的に学生が集まり行う自主ゼミ活動であるが、そもそも自主ゼミとは一体どのようなゼミのことであろうか。白井・高橋によれば「単位とは関係なく、学生が学習したいことを学習するゼミで、利点としては大学で開講されていないテーマを学習できる、また自分たちのペースで進めることができる、そしてみんなで議論をたつぷりできること」とある。また、大石の『東京学芸大学「自主ゼミ」の意義と実態』には、「『自主ゼミ』の活動・形態は多様であり、一概に定義化しにくい、最大公約数として、『学生が、みずからの興味・関心をもとに、主体的に参加・活動する授業外の教育研究活動』といえる。正規のカリキュラムに位置づけられていないため、学生は『自主ゼミ』に参加しても単位が与えられるわけではなく、教員も報酬はない、いわば非公式の活動である。種々の制約がないため、学生は所属・専攻を越えて他分野の『自主ゼミ』に参加したり、複数の『自主ゼミ』に参加することが可能」とある。改めてこれらを踏まえると、被害者支援研究室の活動は、自主ゼミの要素が含まれる活動であり、何より岡山県北地域で実際に支援活動しているという所に大きな特徴があるものである。

しかし、一方で大石は、『自主ゼミ』は、カリキュラム外の活動であることもあり、（中略）現在にいたるまで、その実態はよくわかっていない」としており、たしかに他の文献でも「自主ゼミ」の実態に関するものは未だ少ないように感じた。当学社会福祉学科では、被害者支援研究室だけでなく様々な自主ゼミが存在し、そのどれもが地域での活動を実践的に行っており、それらの活動についての評価は一定程度なされてきたように思う。しかし、一方で自主ゼミ活動に取り組むことによって、学生がどのような変化の過程を遂げているのかは未だ明らかとなっていない。様々な地域で活動することで起こるであろうその変化は、ソーシャルワークを学ぶ学生にとって大学での学びだけではない、何かしら意義のあるものと推測され、本研究を行うことによりその変化が何であるのか、その過程と共に明らかになるのではないかと考えている。以上のことから本研究の目的は、被害者支援の研究と実践を行うために自主組織を作り、犯罪被害者の気持ちを理解し、被害者も加害者も出さないまちづくりをするために岡山県北を拠点に取り組んでいる学生の変化を

捉えること、とした。

## 2. 2022 年度の活動

以下、毎年実施している取り組みについて 2022 年度の実績を報告する。

### ①勉強会

2022 年度の勉強会では、まずは犯罪被害に遭われた方について理解したいとの学生からの意見があり、交通事故被害者家族の手記を読み込みつつ、支援制度・支援機関・心理的影響のテーマについてそれぞれ 3 つのグループに分かれて調べ、まとめた。また、それぞれのグループの内容を共有するための発表会を開き、引退した 4 年生から助言をもらった。



### ②性犯罪(性暴力)被害防止のためのチラシ作成

2021 年度の活動の振り返りの際、学生たち自らの手で作成したチラシを地域で配布したいとの意見があがった。2021 年度に、性犯罪(性暴力)被害防止のための活動を主に行ってきたことを活かし、「性犯罪の現状を知ってもらう」「性犯罪が潜在化しやすいこと、打ち明けにくいこと」「もしものために相談機関を知ってもらうこと」の 3 つを伝えたいとの思いを再確認し、チラシの作成を行った。

チラシに載せる趣旨として、「あなたは今、性犯罪(性暴力)被害について知っていることはありますか？私たちは、このチラシを通して、性犯罪(性暴力)被害の現状を知ってもらい、自分事として考える一つのきっかけとなつてほしいと思います。また、自分や周囲の人が被害者となったときに、できるだけ早く必要な支援を受けるために、相談できる場所を知ってもらうことも目的の一つです。」を掲げ、津山警察署や公益社団法人被害者サポートセンターおかやま(通称 VSCO) (以下、VSCO) <sup>1)</sup> から情報提供や打ち合わせを行い作成した。

### ③犯罪被害防止のチラシ等の配布

11 月 26 日、津山総合体育館でプロバスケットチームのトライフープ岡山公式戦「県民応援デー」が実施された。このイベントに設置された岡山県情報発信ブースの一つ『子どもの健全育成キャンペーン』において学生は、チラシ・グッズの配布を行った。このイベントは、来場者に青少年の犯罪被害について防犯意識の向上を呼びかける目的で岡山県が主催したもので、2022 年度の活動の②で報告した「性犯罪(性暴力)被害防止のためのチラ

シ」も同封し配布した。

また、12月16日にも、学内において同様のチラシとグッズの配布を行った。

あなたは今、性暴力被害について知っていることはありますか？

みんなに知ってもらいたい  
～性暴力のこと～

私たちは、このパンフレットを通して性暴力被害の現状を知ってもらい、自分事として考える一つのきっかけになってほしいと思います。また、自分や周囲の人(家族や友人、知人)が被害者となったときに、相談できる場所を知っていただきたいと思います。

～岡山県の現状～

岡山県警から提供していただいた情報によると、令和2年中に強制性交等の被害に遭った性犯罪被害者数は岡山県全体で154人です。このうち男性が18人、女性が136人となっています。この人数以外にも明らかにされていない被害者も存在します。なぜなら被害に遭うと、周囲に打ち明けにくい傾向があるからです。性に関する話題を話しにくい風潮や、自分が責められるかもしれないといった思いが要因となっています。

被害者の年齢

年齢	割合
10代以下	5%
20代	2%
30代	16%
40代	77%

被害内容

内容	割合
強制性交等	10%
強制わいせつ	29%
その他の性犯罪	61%

岡山県警



#### ④パネル展示

パネルのテーマは、「交通事故被害者支援について考えよう」とし、2022年度の活動の①で報告した勉強会の内容を踏まえたものとなっている。具体的には、岡山県の交通事故の実態や交通事故被害者家族の手記の抜粋、手記を通じて学生が考えまとめたこと(心理的影響・支援制度・支援機関)で構成されており、犯罪被害者週間に合わせた11月25日から12月1日まで、津山市役所1階のロビーで津山市と共同開催した。



学生から皆さんに伝えたいこと

事故の被害者は亡くなった少女だけではありません。兄弟を含むご家族は、事故直後から周囲の方のちょっとした視線、言葉や態度に傷つきます。これらを二次被害と言います。

このような状況は、全ての犯罪被害者とその家族においても、共通する部分であると私たちは考えます。

もしも、自分や大切な人が犯罪被害に遭ってしまったら、あなたはどう思いますか？  
そして、その時、どのような対応を周りの方にして欲しいか想像してみてください。

地域で犯罪が起きた際に、被害者の支え手になるのは、警察・弁護士・臨床心理士だけでなく親族や同じ地域に住んでいる皆さんもその1人です。

一度、「犯罪被害者とその家族に専門家ではない私たちができることは何なのか」考えてみましょう。

### 3. 研究方法

- ・ 研究対象者：2022 年度より犯罪被害者支援研究室に加入した学生 6 名
- ・ 調査方法：半構造化面接による個別インタビュー調査
- ・ 調査時期：1 期(2022 年 9 月 26 日(月)～10 月 15 日(金)の期間の中で 1 回)  
2 期(2023 年 1 月 10 日(火)～1 月 31 日(火)の期間の中で 1 回)
- ・ データの内容：調査者のメモ及び IC レコーダーへの音声録音
- ・ 調査内容：犯罪被害者支援研究室での活動に参加する前と後、また自主ゼミ活動の最中における自身の変化

### 4. 倫理的配慮

研究対象者に対し、インタビューの目的と方法、内容、参加が任意であること、IC レコーダーによる録音と録音データの保管方法、個人情報取り扱い等について口頭と文書により説明し、同意書にサインをしてもらい調査協力の同意を得た。また、美作大学・美作大学短期大学部研究倫理審査委員会の承認を得た(受付番号 2022-9)。

### 5. インタビュー結果

研究対象者 6 人の内、4 人からインタビューをすることができた。まず自主ゼミ活動に参加しようと思ったきっかけについては、以前から興味があった人や、友人からの誘いで活動してみようと思った等、対象者それぞれであった。自主ゼミに参加する以前の活動へのイメージについてもそれぞれ個別性があり、実際に活動を開始する中で、イメージしていたそれとは異なるとギャップを感じているという発言もあった。自主ゼミ活動に取り組みだした当初、活動自体に積極的に関わっていないことや、準備の大変さ、今後の活動への不安もある一方、勉強会での手記の読み込みにより、犯罪被害者やその家族への支援について考えることができるようになったり、上級生の前で自身の意見を伝えられるようになったなどの発言があった。約 1 年弱の自主ゼミ活動を終えた頃には、活動の達成感や自信につながったと自分自身の中の変化や、地域での被害者支援に関わる様々な機関の方との関わりの重要性を、活動を通じて実感していることが明らかとなった。また、次年度以降の活動について、先輩と同じように主体性をもってしっかり活動していけるか不安な気持ちもありつつ、さらに地域と関わりながら自分たち学生ができる被害者支援活動へ向けての意欲的な思いも明らかとなった。

### 6. まとめ

本研究は、地域と関わりながら自主ゼミ活動を行っている学生を対象としてインタビュー調査を行い、それに基づいて学生の変化を捉えようとしたものである。もちろん、この結果が、自主ゼミにおいて学生自身が地域と関わりながら活動することの意義全体を明らかにしたものとは言えない。たしかに、地域と関わりながら活動している自主ゼミは、地



域の課題を住民と一緒に明らにし、それに対する解決策や提案を模索することで、地域の発展や改善に取り組むことができると他の自主ゼミ活動の報告からも明らかとなっている。しかしながら、自主ゼミ活動に取り組む学生の変化やその過程について検証する研究はあまりされてきていない。本研究は、たしかに特定の調査結果によるものではないとはいえ、研究の蓄積がまだまだされていない領域における一例として報告できたことに意義はあると考える。今後は、今回の調査のより詳細な分析や、継続的な調査、他の自主ゼミへも調査を行い、それぞれの差異や特徴を踏まえた上でさらなる分析を行っていく必要があると考えている。

最後に、今回の報告は、これまで新谷芳子准教授の指導のもと、学生が犯罪被害者支援活動を実践してきたものを引き継いだものである。新谷芳子准教授には、育児休業中にもかかわらず活動に関する様々な助言を多くいただいた。この場を借りて、感謝申し上げる。

## 註

- 1) 公益社団法人被害者サポートセンターおかやま（通称 VSCO）は、Victim Support Center Okayama の頭文字をとって「VSCO」と呼ばれている。VSCO は、2003 年 11 月に任意団体として発足し、「地域の力で被害者の支援を」を合言葉に、犯罪被害者やその家族、遺族を支援する岡山県公安委員会指定犯罪被害者等早期援助団体である。また、性暴力・性犯罪被害者のためのワンストップ支援センターとして性暴力被害者支援センター「おかやま心」を設置・運営している。

## 参考・引用文献

- 大石学（2018）『東京学芸大学「自主ゼミ」の意義と実態—附属図書館「自主ゼミ等」アンケート調査によせて』東京学芸大学附属図書館。
- 白井利明・高橋一郎（2008）『よくわかる卒論の書き方』ミネルヴァ書房。
- 新谷芳子（2019）「地域と連携した学生参画による犯罪被害者支援に関する研究」『美作大学・美作大学短期大学部地域生活科学研究所所報』16. 11-18.
- 新谷芳子（2020）「岡山県北における学生参画の犯罪被害者支援のネットワークについて」『美作大学・美作大学短期大学部地域生活科学研究所所報』17. 17-21.
- 新谷芳子（2021）「地域と大学生が連携する犯罪被害者支援の取り組みについて」『美作大学・美作大学短期大学部地域生活科学研究所所報』18. 37-43
- 新谷芳子・加藤利恵（2023）「犯罪被害者支援の推進に向けた専門機関との連携に関する研究—性犯罪・性暴力被害の予防と早期支援につなぐとくみ—」『美作大学・美作大学短期大学部地域生活科学研究所所報』19. 61-68